

さくらそう通信

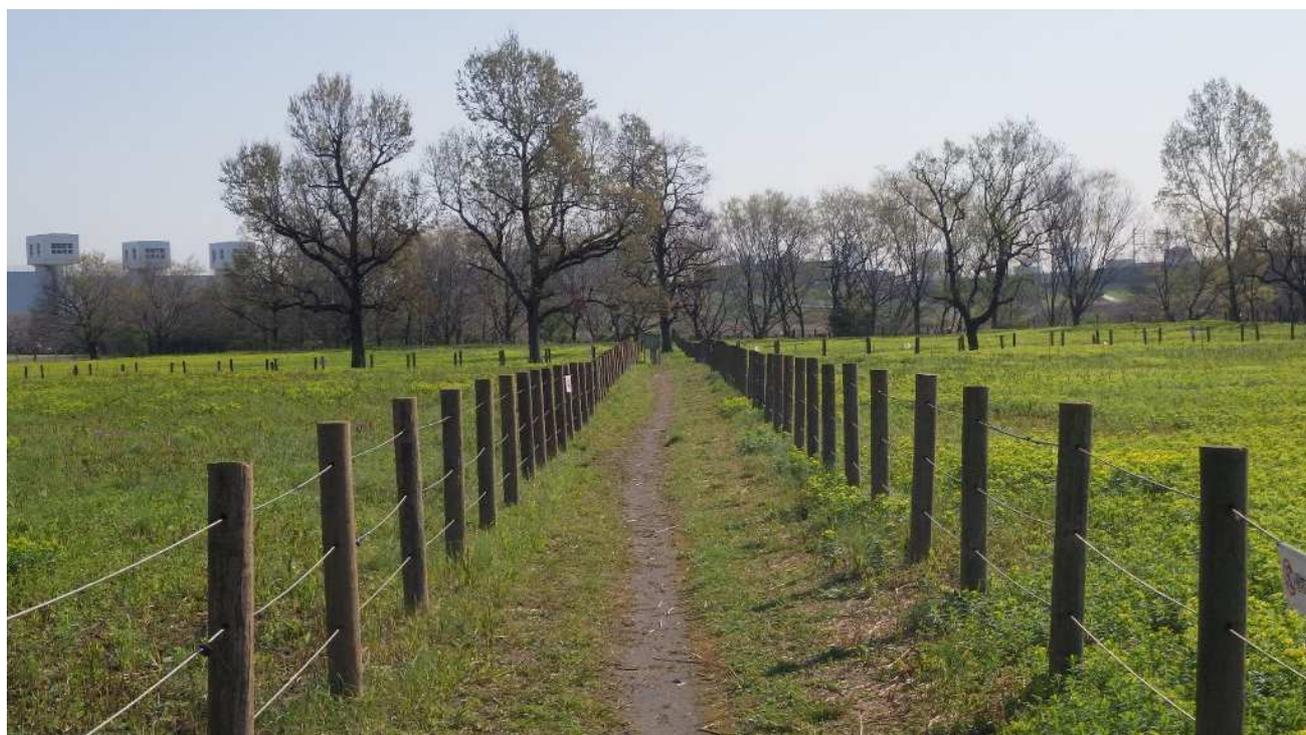
VOL.35 2026.3.31



サクラソウ自生地で見られる寄生関係

特別天然記念物田島ヶ原サクラソウ自生地（以下自生地）では、サクラソウの他にも様々な生物の営みを見ることができます。生物は、様々な相互関係を持つことで、生態系を構築しています。それらの相互関係には、捕食・被食の関係や資源をめぐる競争などが分かりやすい関係として有名ですが、その中の一つに寄生が挙げられます。

寄生とは、ある生物が他の生物から栄養などを持続的かつ一方的に奪う関係のことで、自生地においても、寄生関係にあることが知られる生物が多数生息しており、その生態の一端を観察することができます。今回は、寄生関係にある生物に注目してみます。



▲春の自生地

サクラソウをはじめとした様々な植物が生育している他、周囲に樹木も見られ、様々な生物のすみかとなっている。その中には寄生関係が知られるものも多くいる。

植物でみられる寄生関係

植物では、ナンバンギセルが寄生性の植物として知られます。自生地にはナンバンギセルの宿主（寄生を受ける側の生物）となるオギやヨシが広く分布していることでナンバンギセルの生育環境が生み出されています。地中で寄生根によりオギやヨシに寄生していることから、観察は難しいですが、栄養や水分を完全に宿主に依存する全寄生植物であるため、緑色の葉緑素がなく、全体が、黄色みがかかったクリーム色で赤い筋状の模様が見られ、光合成をおこなう植物とは明らかに違う様子が観察されます。赤紫の花は比較的大きく、独特な形をしていることから目立ちそうですが、光合成をしないからか、オギやヨシの影などに生えることも多く、を見つけるのは難しいです。しかし、通路沿いにも生えていることが多いので、慎重に探すことで見つけることができるかもしれません。また、小さなまとまりを作っているのが普通ですが、時に多数が大きなまとまりを作っていることもあり、目立つこともあります。



▲ナンバンギセルの花



▲ナンバンギセルの宿主となるオギ

ナンバンギセルは全寄生植物ですが、自生地では、光合成を行う緑色の葉をもつ半寄生植物も観察できます。ヤドリギは半寄生植物の一種で、自生地内のエノキの枝に寄生している様子が見られます。ヤドリギは、エノキの木の高い位置にあることと、エノキの葉が茂っている時期にはエノキの葉に隠されて見るのが難しくなりますが、ヤドリギは常緑性で冬にも緑の葉をつけているので、エノキの葉が無い冬の時期には葉が茂っている様子が目立ちます。ヤドリギは、小さな花と、黄色い実をつけることが知られていますが、自生地で見られるヤドリギは、前述のとおり樹木のかなり高い位置にあるので観察するのは困難です。このような高い場所に寄生できるのは、ヤドリギの果実を食べた鳥が、木の高い位置でフンをすることで、樹木の高い位置に種子が付き、そこから寄生するからであるといわれています。自生地には多くの鳥が来ますが、鳥の営みも、ヤドリギから垣間見ることができるかもしれません。



▲ヤドリギが寄生している様子



▲ヤドリギの宿主となるエノキの花

昆虫で見られる寄生関係

自生地では、植物だけでなく、昆虫などの動物でも寄生を行うものが観察されます。自生地で寄生性が知られる昆虫には、捕食寄生という寄生の形をとるものがあります。捕食寄生とは、寄生の結果、宿主を殺してしまう寄生の形です。

自生地では、通路をよく観察すると、ホソツヤアリバチという、細長いアリのような翅をもたないハチの仲間が見られることがあります。このハチは、ハンミョウの仲間に捕食寄生することが知られています。自生地にはトウキョウヒメハンミョウが多く生息しているので、おそらくそれに寄生しているのではないかと思います。このハチは、特殊な方法で宿主となるハンミョウ類の幼虫に寄生することが知られています。ハンミョウの幼虫は、地面に穴を掘って生活している肉食性の昆虫で、地表を歩く生物を穴に引きずり込んで捕食します。ホソツヤアリバチの雌はハンミョウの幼虫に襲われて、巣穴に引き込まれますが、その際に卵を産み付け、寄生を成立させるといわれています。寄生の瞬間を自生地で観察するのは難しいですが、人知れず両者の攻防が行われていることに思いを馳せることができます。



▲自生地の地上を歩くホソツヤアリバチ



▲ホソツヤアリバチの宿主となると思われる
トウキョウヒメハンミョウ

自生地では、ヒメハラナガツチバチという、花に集まる胴が長い中型のハチを観察することができますが、このハチも、捕食寄生を行うことが知られています。ヒメハラナガツチバチはマメコガネなどのコガネムシの仲間の幼虫に捕食寄生をすることが知られています。コガネムシの幼虫は地中深くにいるので、ヒメハラナガツチバチのメスは深く穴を掘ってコガネムシの幼虫に近づきます。ヒメハラナガツチバチは雌雄で見た目が少し違い、穴を掘るメスは大型でがっしりとした体格ですが、オスは比較的小型で細身です。こちらも、寄生が起こるのは土の中で、寄生している様子を観察するのは困難ですが、ヒメハラナガツチバチもマメコガネも、成虫が自生地で開花した植物に訪れている様子はよく観察できます。



▲オスのヒメハラナガツチバチ



▲メスのヒメハラナガツチバチ



▲ヒメハラナガツチバチの宿主となるマメコガネ

花を訪れるハチの間では、ダイミョウキマダラハナバチも寄生を行うことが知られています。ダイミョウキマダラハナバチは、同じように花を訪れるハチの間である、ヒゲナガハナバチの仲間に寄生します。ダイミョウキマダラハナバチはヒメハラナガツチバチが行う寄生とは少し異なり、ヒゲナガハナバチの仲間が幼虫のために集めた花粉や蜜などの栄養分を横取りすることで、ヒゲナガハナバチの仲間に寄生します。このように、宿主が餌として確保したものを餌として得るなど、宿主の労働を搾取る形の行動を取ることを労働寄生と呼びます。

ヒゲナガハナバチの仲間は、ダイミョウキマダラハナバチの他に、マルクビツチハンミョウにも寄生

を受けることが知られていて、寄生を通じて複数の生物が関わりあっていることが分かります。また、マルクビツチハンミョウは埼玉県レッドデータで、準絶滅危惧 1 型とされる絶滅危惧種の一つですが、このような寄生を通じた生物間の関わりが貴重な生物の生存を助けていると言えるでしょう。



▲花を訪れるダイミョウキマダラハナバチ



▲自生地内の通路を歩くマルクビツチハンミョウ



▲ダイミョウキマダラハナバチやマルクビツチハンミョウの寄生を受けるヒゲナガハナバチの仲間（写真はシロスジヒゲナガハナバチ）

まとめ

このように、自生地では、様々な生物が寄生という方法で関わっています。これに加え、これらの寄生を行ったり、宿主になったりする生物は、当然、寄生以外の方法でもほかの生物と関わる場所が多くあると考えられます。例えば、植物で紹介したナンバンギセルは目立つ花をつけることから、昆虫に花粉を運んでもらう虫媒花であることが分かりますし、ヤドリギは、寄生の方法にもあるように、果実が鳥の餌として利用されます。昆虫では、今回ご紹介したものは、多くが花を訪れて、花粉を運ぶポリネーターとしての役割を果たしていて、植物の繁殖に関わっています。また、寄生によって、個体数が調整されることが、競合相手の個体数に影響する間接的な関わりも考えられます。このように、寄生という特殊な生物同士の関わりは、意外にも自生地の生態系の中で大きな影響力を持っているのではないかと思います。自生地には今回紹介したもの以外にも、様々な寄生の形を観察することができます。寄生という視点から自生地を観察すると、今までとは違った新たな自生地の形が見えてくるのかもしれない。

さくらそう通信 35号 発行日：令和8年3月31日

編集・発行：さいたま市教育委員会 さいたま市浦和区常盤 6-4-4 ☎048-829-1723（文化財保護課）